



VIP #5
REYES

グレッグ・レイス

プロケードコミュニケーションズシステムズ
会長兼CEO

VIP #6
MINATO



港 宣也

株式会社ビジネスポートシステムズ 社長
株式会社東京メトロポリタンエリアネットワーク 社長

e-Japanの航路を探るビジネスサミット

21世紀のVIPs

いま、iDCを基盤としてさまざまなビジネスが組み合わさり、eビジネスのインフラが再構築されている。今回登場するのは、まず、SANスイッチの分野で9割のシェアを持ち4月に日本法人を設立したプロケードのレイス氏。対するは、ストレージを前面に押し出したiDCのビットアイルや、超高速通信サービスの実験と実用化を進める東京メトロポリタンエリアネットワークを推進するBPSの港氏。この2人がホストの長井正利を相手に、新しいネットワークインフラについて語る。

impress TV 番組
「INTERNET Magazineインタビュー」で、この対談を放映！ impress.tv
 ONAIR 6/26(火)・7/3(火) 23:30 ~ ONDEMAND 放送後随時

 **HOST**
NAGAI

ホスト：長井正利
サン・マイクロシステムズ
常務取締役。iDCイニシア
ティブの発起人の1人として専
務理事を務める。2001年3
月より政府の情報通信審議
会専門委員にも就く。

 **TEXT**
NAGANO

記録・構成：長野弘子
東京の雑誌社勤務、ニュー
ヨークのウェブ出版社編集
長を経て、ジャーナリスト
として独立。著書に『シリ
コンアレーの急成長企業』
(インプレス刊)など。



ワイヤレスメッセージング企業のワイヤレスアクセス社で社長を務めた後、1998年にブロードコミュニケーションズシステムズに社長兼CEOとして入社。2001年5月に会長兼CEOに就任。

Photo: Koita Naoki

VIP #5 GREG REYES

ブロードコミュニケーションズシステムズ 会長兼CEO

グレッグ・レイス

レイス: ガートナーグループとデータクエストによると、現在iDCのコストの46%がストレージに費やされ、今後数年間で80%以上になるとされています。また、ストレージ市場のデータ容量は、2000年の数百ペタバイトから2005年には4000ペタバイトにまで拡大すると予測されています。これは、ストレージが巨大な可能性を秘めた市場であり、IT予算の多くがストレージに費やされることを示唆しています。

長井: プロケード社は設立後わずか数年で、SAN (Storage Area Network) のオープン系ファイバーチャネルスイッチの分野で90%以上のマーケットシェアを獲得しました。このような急成長と市場での独走態勢を支えている秘密とは何でしょうか？

ストレージやハイパフォーマンスシステムのネットワークといったコンセプトは存在しませんでした。このため、われわれは独自開発した技術をいち早く市場に投入することができ、大手のサーバーやストレージ企業のほとんどすべてに幅広く採用されたのです。

レイス: プロケードは、ギガビット通信のコンセプトをストレージ市場に持ち込み、SANを普及させるという企業ビジョンのもとに1995年に設立されました。当時、ス

長井: 先日、サンノゼのプロケード本社を訪れた時、「エンドユーザーのストレージへの投資がサーバーへの投資の10倍になる」というお話を伺いました。

長井: 今後、ストレージとサーバーの関係が変わり、システムがサーバー中心からストレージ中心へ、あるいは、まったく別の新しい考え方になるかもしれません。ストレージもサーバーとは完全に独立した存在になって、どんどんオープン化していくと思います。

レイス: そうですね、クライアント/サーバーのコンセプトはよく理解されていますが、ストレージ/サーバーのコンセプトに関しては、その理解はまだ始まったばかり

だと思います。ほんの数年前まで、サーバーとストレージは一对一の関係でした。現在では、ストレージは多数のコンピュータからアクセスできる共有リソースとして進化しつつあります。SANを使えば、たとえば企業のリソース管理分野で、特定のアプリケーションに対して特定の処理能力やストレージスペースを割り当てることができ、SANは、新しいデータ通信分野におけるもっとも重要な技術として定着し、将来的にはサーバーとストレージの関係を大きく変えるものになると考えています。

長井：プロケード社では、目まぐるしく成長するストレージ市場に向けた将来的な事業戦略はありますか？

レイス：長期的な戦略として、複雑なネットワーク管理を簡易化しセキュリティを強化するためのソフトウェアへの投資を増やしています。たとえば、ネットワークの管理やデータ転送を簡単に行えるAPIを提供しており、現在150社もの企業がプロケードのネットワークインフラ向けのアプリケーションを開発しています。

長井：ベンダーを超えた存在になる感がありますね。ファイバースイッチ自身にも変化があるのかどうか教えてください。

レイス：スイッチは徐々にインテリジェント機能を備えていくと思います。スイッチがアプリケーションに指示を与えてデータを収集させたり、ネットワークポリシーを設定したりといったことは、いままでのデータ通信環境の中では存在しなかった新しいコンセプトです。しかし、これは不可欠な技術であると考えています。

長井：プロケード社は日本法人を設立しましたが、日本市場のストレージ市場全般や今後の戦略について教えてください。

レイス：日本市場でのマーケティング戦略には、3つの側面があります。まず最初は、EMCやコンパック、IBM、デル、サン・マイクロシステムズなどOEMメーカーとのシステムレベルの協力。次に、日立、富士通、NECなどの日本のシステム企業との連携を緊密に取り、プロケード製品の導入に努める。さらに、東京エレクトロン(TEL)

と提携して、システムインテグレーターやVARに対するプロケード製品の提供です。われわれは、日本市場がSANに対して積極的な姿勢を示していることに手ごたえを感じています。

長井：IP-SANやNAS(Network Attached Storage)などの登場は、SANにいかなる影響を与えていますか？

レイス：NASもストレージ市場にとって重要な技術で、今後は、SANとNASがスム-ズに連携していこうと思います。また、SCSI-over-IP(iSCSI)は、SANをLANやWANに接続するために必要な技術であり、これはSANの領域をさらに拡大するものです。サーバーのための高速I/Oでは、「Infiniband」という技術があり、いずれはSAN環境に組み込まれていくでしょう。つまり、単一のネットワークや単一のプロトコルしか市場に存在しないのではなく、さまざまな技術や製品が今後も次々と登場して市場に受け入れられていくでしょう。

長井：ありがとうございました。

ストレージも サーバーと同様に オープン化する

長井正利

IT予算の多くが
ストレージに費やされる

グレッグ・レイス



VIP #5
REYES



東洋情報システムを経て、1987年にビジネスサポートシステムズ(BPS)を設立。2001年にはTTNetや東京エレクトロン、エイベックスらと東京メトロポリタンエリアネットワークを設立して社長に就任。早稲田大学講師も務める。

Photo : Nakamura Tohru

VIP #6 MINATO NOBUYA

株式会社ビジネスサポートシステムズ 社長
株式会社東京メトロポリタンエリアネットワーク 社長

港 宣也

長井：先日、BPS、寺田倉庫、ワンビシアーカイブズと3社で天王洲アイルにビットアイルというiDCを設立していますが、コンセプトを教えてくださいませんか？

港：たとえば、BPSの顧客3社があるiDCに入っていますが、3社とも同じ決済機関にそれぞれ専用回線でつながっています。iDCがまとめて回線を引き、それを顧客に再販すれば双方にとってコストダウンが図れるし、問題も減ります。iDCにはこうしたビジネスチャンスが無数にあります。また、iDCは現在「ネットワーク中心型」のサービスを提供していますが、これはあくまでコンピュータの視点に立ったものです。ユーザーがもっとも重視しているのはデータであり、そのため「データ中心型」のサービスを提供していきます。

長井：「データ中心型」という点でも、これからのiDCはストレージの比重が高まると思います。iDCとストレージの関係の今後について教えてください。

港：まず、非常に高価だったストレージ機器がある程度安くなることにより、iDCに膨大なナレッジが集積され、そこにユーザーが自由にアクセスできるようになるというのが、近い将来のデータ像です。また、広帯域になれば、文字データから表現力の豊かなリッチコンテンツへと比重が移っていきます。リッチコンテンツの扱いになると、どうしてもストレージが重要になってきます。そのため、近い将来にはストレージサービスが大きな役割を果たすことになると思っています。

長井：インフラを支えるプロトコルはどう変わっていくのでしょうか？

港：この数年以内に急成長する光回線は、最終的にはWDM (Wavelength Division Multiplexing) ベースになると思っています。WDMを使えば、現在で2.5Gbps、2005年までには10Gbpsの転送速度とい

う使い切れないくらいの太さのパイプを提供できます。次に、WDMではネットワークのレイヤー1（物理層）でつながります。ユーザーから見た場合、TCP/IPよりイーサネットなどのほうが便利だと考える人もいます。一番コストパフォーマンスのいいプロトコルを使えばいいんじゃないかと思っています。

長井：将来、WDMが低コストになった際には、家庭にも普及すると思いますか？

港：可能性というよりも、普及すると確信しています。少なくとも、ソニーのプレイステーション2よりはるかに安く提供できると思います。あとは、どこの会社がサービスを開始するかという話だと思います。

長井：おもしろいですね。「i」が付くか付かないかは別として、港さんはiDC どちらの相互の連携が大事だと常々おっしゃっていますが、少しくわしく教えてください。

港：iDCの使命とは、サーバーをきちんと保管して落ちないようにする、何かあったときに24時間体制でサポートすることであり、各iDCがその部分で大きく異なることはありません。iDC どうして組めば、顧客はiDCに入るだけで決済システムやコンテンツなどを数百種類のメニューのなかから選択でき、自社開発する必要がなくなり、競争力をますます高めることができます。この認識を定着させることが重要です。

長井：港さんは、東京メトロポリタンエリアネットワーク（TMAN）の社長も務めています。TMAN設立の背景や、実験の目的などを教えてください。

港：WDMを実際に使ってみて驚いたことがきっかけでした。WDMは、電源の延長コードのように使えます。ATMも、ギガビットイーサも、イーサネットも、T1回線もつながりましたし、しまいはDVDプレイ



WDMはプレステ2より安くなる

港 宣也

これからのiDCはストレージの比重が急激に高まる

長井正利

ヤーに50キロ先からテレビをつないで見られました。これを目の当たりにしたのは衝撃でした。それと同時に、ネットワークを組むというわれわれのビジネスは必要なくなるのではないかと、真剣に考えましたね。町の電気屋になってしまう（笑）

しかし、ふとハードディスクにモノだけ入れておけば皆が勝手に取りに来て、簡単にビジネスができるんじゃないかと考えました。たとえば、プレステ2のDVDプレイヤーを切りとって、代わりにWDMを差し込むと、レンタルビデオ店に行かずにクリック1つでビデオをダウンロードできるという風に。

長井：ビデオオンデマンドですね。

港：TMANでは、こうした新たな可能性を持った技術を普及させるため、接続技術などを共有し、各企業がそれぞれに見合った

ビジネスモデルを作り上げることをサポートしていきたいと思っています。

長井：iDCやネットの未来がどういう風になるのか、港さんが思い描いている未来像を教えてくださいませんか？

港：2.5Gbpsの広帯域サービスは、PCの内部バスよりも高速で、マザーボードのほうがかえってボトルネックになるという世界です。将来はネットワーク上のナレッジはすべて共有でき、テキストデータだけではなくビデオを含めたリッチコンテンツも簡単に共有できるようになります。これにより、今まで経験したことのない新たな相乗効果がどんどん生み出されてくると思います。

長井：ありがとうございました。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp